

準備委員会企画シンポジウム

学校教育実践研究における心理学者の役割

—対象の規模に着目して—

【企画趣旨】

学校教育現場は、複数の学級が1つの学校に、また、複数の学校が1つの自治体に、ネストされた構造を持っている。近年の教授・学習研究では、階層線形モデルのような分析手法が浸透したこともあり、こうしたネスト構造を考慮しながら、学級変数が学習者に及ぼす影響を検討した研究が多く見られるようになっている。

本シンポジウムでは、こうした近年の動向から着想を得て、学校教育現場での実践研究を、対象の規模の観点から捉えることを試みる。教育心理学研究に「実践研究」が開設されてから20年近くが経過し、実践者自身による研究だけでなく、心理学者が学校教育現場に関わり、実践者と協同して行われた研究も多く発信されてきた。しかし、実践の対象に注目してみると、1人の学習者や1つの学級を対象としたものから、1つの学校を対象としたものまで、その規模は様々である。心理学者が学校教育現場に関わり、実践研究を展開していくには、対象の規模によって異なる問題が生じることが予想される。本シンポジウムでは、学級や学年、学級、地域といった様々な規模の実践研究を取り上げ、それぞれの規模に特有の問題やその対処方法を共有することで、心理学者と学校教育現場の協同の在り方について、フロアの方々と議論を行いたい。